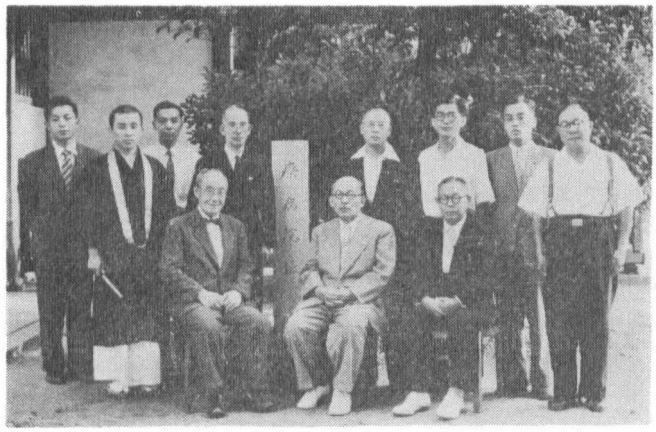
編 集 後 記

京都府立医科大学百年史を編集するにあたって，わたくしたちは栄誉ある編集委員にえらばれた。はじめは，京都府立医科大学八十年史を補足できれば，との軽い気持で出発したわたくしたちは，やがて



八十年史編集委員による青蓮院療病院址碑建立（1952）

そうはいかないことがわかった。八十年史が刊行された1955年(昭和30年)は，まだモノ不足の時代だった。いまのように複写技術も進歩してない。資料を集めるのも，すべて手書きだった。わたくしたちは，八十年史の編集・執筆にあたった片岡八束，川井銀之助，宮田一，中野操，土屋栄吉，横田穣の諸氏にあらためて敬意を表すると同時に，将来はさておき豊かな時代に編集・執筆をしなければならなくなったわたくしたちは，これら先人の果たし得なかったことを果たさなければならない責務を痛感した。

それに，大学の社会的位置づけが，八十年史の編集・執筆当時とはすっかり変わってしまった。太平洋戦争後の学制改革で，日本の大学は大きな変革を余儀なくされたが，医科大学は別格だった。予科の廃止，卒後1年のインターン義務，医師国家試験の新設はあっても，教育・研究機関の場としての医科大学専門課程は従前どおり4年の課程を堅持した。アメリカ式の複雑な単位制が導入されることもなかった。これに対して，八十年史の編集・執筆時代以後の変化はあまりにも大きかった。進学課程が専門課程と同格の存在として新設されたほか，大学紛争を介在させながら，卒業直後の医師国家試験，2年間の臨床研修の勧奨が制度化された。大学に対する社会的要請もふえ，大学が象牙の塔であることを止めなければならなくなった。

そうした事情を顧慮して，わたくしたちは，京都府立医科大学史が「おらが大学自慢」にならないことを最大のねがいとした。豊かなもしくは豊かだった時代を反映してか，最近の日本では，大学史，社史刊行の花ざかりである。それらのなかには，関係者以外はまったく興味を示さないものも少なくない。わたくしたちは京都府立医科大学百年史をそのようなものにしないことを，何よりの念願とした。むしろ「ある特異な医学校の歴史」に仕立てあげたかった。

けれども，京都府立医科大学関係者以外のひとたちにも関心のあるものをめざすと，大学の歴史のひとこまとして是非とも活字にしておかなければならない部分が，まったく脱落するおそれがある。脱落をくいとめるには，八十年史の通史，年表，索引の三本立てでは具合がわるい。わたくしたちはあらたに教室史，病院統計をつけ加えることにした。

理想と現実は一致しない。わたくしたちの念願がどれほど達成されたかは，本書によって判断していただくほかはない。なお，通史は細田四郎，楠智一，鯖田豊之，佐野豊，三宅清雄，山本尤，教室史は各教室執筆責任者，病院統計は永田久紀，年表は藤田哲也，山田博が担当した。全体の総括および写真ページ編集には三宅清雄があたった。鞍岡香一，水越治，中村恒男は無任所の形で編集に参画した。このほか，日本の社会のなかでの大学の位置づけをめざした関係もあり，大学内外の個人や諸機関からもあたたかい援助をうけた。それらのひとつひとつの氏名や名称をあげることはできないが，すくなくとも通史の執筆にあたっては，京都府立総合資料館，京都府議会図書館の協力なしには不可能であったことを明記しておきたい。また，大学の歴史を生(なま)のものとして，つづりたいために，藤田登，後藤五郎，飯田文武，飯野豊，片岡八束，野中弥一，坂部茂，志多半三郎，竹沢徳敬，山田重正，弓削経一，女子専門部の歴史のために，藤川つや，藤田せつ，橋本なおみ，井上佳子，南周子，吉川浩子各氏にお集まりをいただいて，お話をうけたまわった(以上の列挙氏名はすべてABC順)。そのほか，石崎長重，石

百年史編集委員 (1972)
細田　楠　山本　永田　藤田　鞍岡
佐野　山田　三宅　中村　鯖田　水越

黒乾蔵の両氏をはじめ，学生課のみなさんにはたいへんお世話になった。本書のレイアウトと製作進行については，株式会社金芳堂編集部長吉岡清氏に負うところが多い。

なお，複写技術の進歩の結果，わたくしたちは膨大な資料を入手することができた。残念ながら，ページ数の関係で，全部を活字にするわけにいかなかった。活字にならなかった部分はマイクロフイルム化され，いずれは百周年記念会館の一室に保存される予定である。この作業は，三宅清雄を中心にすでに終了した。

最後に，本書の刊行が百周年どころか，百一周年を越えるまで延引したことをおわびしたい。編集・執筆のおくれがちだった編集委員にとっての傷手は，何よりも，1973年(昭和48年)4月，佐野豊が学長

に就任したことである。あわてて分担の一部変更をおこなわざるを得なくなった。にもかかわらず，佐野豊はもちまえのタフさにものいわせて，かなりのページ数の執筆をこなしきった。刊行のおくれには，このような内部事情のあることを了解していただきたい。なお，通史の部分については，文体の不ぞろい，内容の重複がかなりみられるが，編集委員会としてはあえて統一をもとめなかった。執筆者以外のものが文章をあれこれいじりまわすことは，個性的叙述の生気をこわしてしまうとの趣意からである。この点では，八十年史の編集方針をそのままひきついだ。ただ，第6章以後の時代における大学内外の環境の激変はあまりにもすさまじかった。いまなお，後遺症は完全には消失していない。アカデミズム史学の分野では，現代史の叙述は20年まえでストップすべきだとの声すらある。現時点で，激変期の大学の歩みを正確かつ客観的にとらえることは，かならずしも容易でない。そうした無理をおして，あえて激変の20年の叙述に挑戦したのは，これからの大学の在り方をさぐると同時に，130～150年史編集の素材のひとつを提供するためだった。第6章以後の文責を編集委員名にしたのは，委員が手分けして資料の蒐集保存につとめたものの，事実や経過のより深く，より広い検討については将来の大成を期待したかったからにほかならない。おわりに，刊行のおくれたことを再度おわびしておきたい。

1974年3月

京都府立医科大学
百年史編集委員一同

京都府立医科大学百年史　非売品

1974(昭和49)年3月10日　印刷
1974(昭和49)年3月20日　発行

編　者　京都府立医科大学百年史　編集委員会
委員長　三宅清雄

発行者　京都府立医科大学長　佐野　豊

製作者　株式会社　文功社
京都市南区上鳥羽南唐戸町103